シンポジウム記録 マアナゴ生活史研究の最前線と資源管理

II-5. 対馬海域

酒井 猛

国立研究開発法人水産研究・教育機構

西海区水産研究所

II-5. Tsushima offshore waters

TAKESHI SAKAI

Seikai National Fisheries Research Institute, Japan Fisheries Research and Education Agency, Nagasaki 851-2213, Japan

1. はじめに

農林統計によると、1995年に5,877トンあった瀬戸内海区の漁獲量は年々減少し、2015年には1,000トンを下回って、近年(2013年および2015-2016年)では、東シナ海区における漁獲量が瀬戸内海区を上回るようになった。2016年の我が国におけるあなご類生産量3,532トン(暫定値)のうち、東シナ海区における漁獲量は894トンと25%を占め、瀬戸内海区の732トンを上回って、我が国において最多の漁獲を担う海区となっている。東シナ海区における2016年のあなご類漁獲量の内訳をみると、長崎県が541トンで61%を占め、山口県、福岡県のそれぞれ172, 163トン(19, 18%)を合わせると、東シナ海区の漁獲量のうち98%をこの3県で占める。長崎・山口・福岡の3県におけるマアナゴを対象とする漁業は対馬海峡およびその周辺海域で行われており、主な水揚げ地は対馬市、下関市、宗像市等である。ここでは、我が国最大の産地である対馬における漁業について述べるとともに、下関を最大の根拠地とし、努力量数値が得られる沖合底びき網漁業(沖底)による漁獲についても述べる。

2. 対馬における漁業

近年、全国で最もあなご類を多く漁獲している長崎県の漁獲の9割以上を対馬が占める。対馬におけるマアナゴに対する主要な漁業は、あなご筒漁業で、主漁場は対馬西沖(対馬海峡西水道)である。水揚げ物は島内で加

工され消費地に送られる他、鮮魚、活魚でも全国に出荷される。対馬におけるあなご類の漁獲量は、1997年には100トンであったものが年々増加し、2006年には1,016トンとなった。以降600-900トンで増減を繰り返し、2015年は621トンであった。一部漁協では、2010年頃からマアナゴ小型魚の保護を目的とし、あなご筒の水抜き穴径拡大の取り組みが自主的に行われている。また、対馬におけるあなご筒漁業は、一部、後述する沖底と漁場を競合する。

3. 沖合底びき網漁業

沖底も対馬海峡域であなご類を漁獲している。島根県浜田以西における2そうびき沖底によるアナゴ・ハモ類漁獲量(大部分はマアナゴ)は、1985年に1,213トンあったものが、1998年の382トンまでいったん減少し、その後2001年には830トンまで回復したものの、再び減少し、2016年は320トンであった。一方、CPUE(kg/網)は1985-1998年に概ね14kg/網前後で変動していたものが、1999年以降は20kg/網前後で増減している。沖底では小型魚保護のため、網目合を一部拡大する試みがなされたが、マアナゴの網目からの逃避が問題となった。そこで現在、コッドエンド天井部のみ大目合の逃避ウインドウを設置し、アカムツ等の小型魚は逃避させつつ、遊泳力の小さいマアナゴは漁獲するという方策がとられている。¹⁾

4. 資源管理

当漁場に来遊・加入するマアナゴ資源を有効に利用するため、他海域と同様、小型魚保護をメインとする取り組みを継続、また強化し、成長乱獲を防ぐような管理が求められる。

文 献

- 1) Watanabe Y, Harada S, Yamashita H, Tokai T. Effect of square mesh window on codend selectivity for blackthroat seaperch and white-spotted conger in offshore trawl net. *Nippon Suisan Gakkaishi* 2010; **76**: 824-840 (in Japanese with English abstract).